　　　　　　「ぼくは写真で世界とつながる」　　

　　　　　　　　ＮＰＯ法人療育ねっとわーく川崎では、年に1回映画会をすることを決めています。今回は、会員のお母さんたちから、「普通に生きる」の続編をぜひ上映したいという声が上がりました。残念ながら、完成はまだとのこと。先に抑えた区民館の大ホールの日程には間に合いません。そこで、紹介されたのが「ぼくは写真で世界とつながる」でした。誰も見たことがないのに、きっと良い映画に違いないと、信じて、市内の特別支援校や施設にチラシを配布してしまいました。障害のある方の家族もたくさん来られる映画会、正直いうと、内心はドキドキでした。

　　　　　　　　上映会開始。やはり、間違いのない映画でした。それ以上に、障害のある人のドキュメンタリ―で、こんなに暖かくほっとできる映画ができるのかと、驚きました。多分、それは、貞末さんの手法にあるのだろうと思います。一緒に旅をしながら、その場その場で主人公である祐二さんや祐二さんに関わる人に、貞末さんが語りかけ、思わずお世話までしながら、一緒に驚き、感動したことが、観ている私たちに、そのまま伝わってくるからだと思います。それは、もしかしたら、撮影の最初から、祐二さんの方が、貞末さんを旅の同行者として巻き込んでしまったからできたことなのかもしれません。

　　　　　　　　祐二さんが沖縄で撮った写真がふんだんに出てくるのも、この映画の魅力です。単なるスナップ写真ではありません。デジタルカメラで、たくさん撮った中から、よいものを選んだのではなく、ここと決めた一瞬にシャッターを押す時には、彼の頭の中には完成した絵として出来上がっている。そういう彼の「天才」ぶりがわかる、写真なのです。

　　　　　　　　私にとってのこの映画の見どころは、米田家の家族です。お母さんは、養護学校をつくるために奔走されたたくましい方ではありますが、特別な子育てをされているわけではありません。お兄ちゃんは弟を宿敵として、取っ組み合いをしてきたことを本音で語っています。どこにでもある家族のようではあります。だけど、今、「自閉症」の子どもを育てるということのしんどさもおもしろさも、米田さんがみんなを代表してきっちりと語って下さっているように思われます。この映画を見た家族の方からも共感の声が上がっています。

　　　　　　　　いつもは、関係者だけになってしまう映画会。思い切って大ホールを借りたことで、一般の方も観に来られました。中には、「生きづらさを抱えていたけれど、この映画をみて、がんばりたい」という感想も。「自閉症」といわれる青年から、私たちが励まされる映画なのです。アンケートには、「もっともっとたくさんの人に見て欲しい。」との声が多く寄せられ、次回の上映会の問い合わせが、もう来ています。

特定非営利活動法人  
療育ねっとわーく川崎  
谷　みどり